

「鯰絵」から見る東日本大震災の復興 “Namazue” and Post 3.11

○李 勇昕・矢守克也

○Fuhsing LEE, Katsuya Yamori

After the 2011 Tōhoku earthquake, people and media used some words as “Ganbarou, Nippon”, “Believe Japan”, “Fighting Fuhyou Higai” for expressing their confidence to face recovery. However, people could not find “Who” should take the responsibility to fight from those words. Especially “Fuhyo-higai”, means damages caused by harmful rumors or misinformation. Since even some experts provide totally different views on the safety of radioactive contamination, the boundary between scientific “truth and false” has been blurred considerably. People have to judge safety of radioactive contamination by themselves rather than government and experts. It is the feature of risk society. In this study, we use “Namazue” from Edo period, to show the relationship of people and disaster. When god do not hold down the “stone”, catfish come to the world and bring the earthquake.”Namazue” showed, people also should take responsibility in the recovery process without god and belief.

1. はじめに

2011年3月11日に東日本大震災が発生して以降、「がんばろう、日本」、「ひとつになろう」、「絆」、などの言葉、スローガンが各メディアに現れていた。これらの言葉は、人々の心を励ます機能をしなから、復興への決心を示す効果もある。他方で、「風評被害」、「安全神話の崩壊」などの言葉も頻繁にマスメディアで使われ、社会に浸透している。福島第一原子力発電所事故の関係で、放射能に対する安全安心に対する社会的な不信感が高まり、復興に対する無力感も露呈している。「がんばろう、日本」や「風評被害」といった言葉の共通点は、主語がないことである。つまり、誰が「がんばる」のか、誰と誰が「ひとつになる」のか、誰が「絆」をつなげるのか、そして、だれが「風評被害」、「安全神話の崩壊」の責任者なのか、明確に記されていない。それは、大規模な災害、事故のあと、特定の関係者が責任を負うのではなく、社会全体で責任を共に背負いながら、時に押し付け合うというリスク社会（大澤，2015）としての特徴と考えられる。

歴史上、災害と社会の責任はどのようなものとして描き出されてきたか。1855年安政江戸地震が発生してから、当時瓦版として出版された「鯰絵」へとさかのぼることができるのではないかと。

「鯰絵」の基本テーマは、鹿島神宮内の要石で抑えられていた鯰が、神無月（10月）に鹿島大明神

が出雲へ出かけているすきに暴れ、大地震が起こったというものである。「鯰絵」には、庶民が地震によって家が倒れ親族を失った怨みとして鯰を叩く様子が描かれている一方で、鯰の口から銭が出て、まわりには地震後の復興景気の恩恵をうける建築業の庶民も見える。つまり、鯰は、庶民の恨みの投射だけではなく、反転、革新、社会を一新にする契機をも意味している。

これまでの「鯰絵」に関する研究は、民俗学の視点から、鯰の「破壊神」と「救済神」の両義性に触れ、災害の社会的な意義を多元的に考察する研究がある（C.アウエハント，1979=2013）。また、北原（2000=2013）は、「鯰絵」を題材に、災害社会史的立場から、災害ユートピア論を展開している。「鯰絵」は、「地震そのものは禍であるが、それがもたらした結果はむしろ福、それも富の偏在を改めさせ、職人層に潤いをもたらす経済的恩恵であった（北原，2000=2013：209）」といった負を転換するシンボルとして多く論じられてきた。しかし、「鯰絵」を用いて、現代社会の災害復興を考察する研究はいまだに少ない。「鯰絵」は、東日本大震災の復興にヒントを与えられるのではないかと。本研究は、鹿島大明神が要石を用いて、鯰を押さえるものから、人々が安心して暮らせる構図（図1）を軸に、「鯰絵」の構図を用いて、東日本大震災の「がんばろう、日本」、「風評被害」といった言葉が持つ意味について再考したい。



図1 鯰絵「要石」(国際日本文化研究センター「鯰絵コレクション」より)

2. 「鯰絵」と東日本大震災

「鯰絵」の要素を東日本大震災で解釈すれば、「鯰」＝「地震、津波、さらに放射能被害などの災害」、「要石」＝「災害を押さえる道具、たとえば放射能測定・検査、避難警報、防災、復興対策など」、「神様」＝「行政、専門家」、そして、「庶民」＝「被災地の住民、被災者、遺族、被災地以外の人々など」と考えられよう。

次に、「鯰絵」の負からの転換事象については、「がんばろう、日本」の言葉と結びつけられる。やまだ(2013)は、「がんばろう、日本」という言葉を、共同体が団結して理不尽な出来事を乗り越える文化的ナラティブであると捉えた。

「がんばろう、日本」に関わるさまざまなナラティブにおいて、「〇〇がない、でも、がんばる」、そして「あなたががんばる、私もがんばる」という構文は、災害を契機にして、日本の助け合い精神、社会の強さを再認識したのだと指摘する。

「がんばろう、日本」のゴールは、「鯰絵」(図2参照)のように、みなさんががんばって乗り越えたら、またいつか神様が要石をきちんと押さえ、庶民が安心して暮らせるように目指しているのではないかということである。

しかし、原発事故の収束不能状況は、この構図を破壊した。「安全神話の崩壊」は、神様が要石を押さえられない、コントロールできない証明である。このような出来事が、「風評被害」をもたらしている。庶民が怨んでいるのは、鯰、神様だけではなく、同じく庶民の立場、つまり被災地外の消費者に対して、怨みを抱えているのである。

たとえば、筆者のフィールド茨城県大洗町は、震災直後、風評被害に遭い、現地の住民は、「観



図2 あんしん要石(国際日本文化研究センター「鯰絵コレクション」より)

光客を呼び込んでもきてくれない、魚を売っても買ってくれない」という言葉で、被災地と被災地以外の人々との信頼関係が失われた様相について表現した。

現代社会の中で、原発事故のような破局的な出来事により、大澤(2008)が言及したように、リスク社会においては神のような絶対的な「第三者の審判」が消失している。負からの転換ができない状況において、放射能の安全安心問題に関しては、行政や専門家の指示ではなく、個人の判断に委ねられている。復興に向けて、決め手は、「神様」のような権威者ではなく、「神様」の責任をも担う「庶民」になるのではないか。

3. 結論

最後に、本研究は、負の転換ができない構図に対し提案していきたい。その1つの試みとして、2014年から、筆者が茨城県大洗町の住民と共同的に、防災教材「クロスロード：大洗編」を開発した。これは、地域住民が自ら対面した自然災害、放射能汚染に関する矛盾、葛藤に基づき、防災ゲーム「クロスロード」を作成したものである。この取り組みからは、住民自身が「要石」を持ち、行政や専門家に頼らずに、風評被害という「鯰」を押さえようとする姿勢がみられる。

【引用文献】

- C.アウエハント(1979=2013) 鯰絵——民俗的想像力の世界、小松和彦ら(訳)、岩波書店(岩波新書)。
 北原糸子(2000=2013) 地震の社会史—安政大地震と民衆、吉川弘文館。
 大澤真幸(2015) 自由という牢 責任・公共性・資本主義、岩波書店。
 大澤真幸(2008) 不可能性の時代、岩波書店。
 やまだようこ(2013) 負を転換する文化的ナラティブー「がんばれ日本」と“I love America” 『日本オーラル・ヒストリー研究』第9号。